

# わたしの聖王戦

◎◎女性が働くといふこと◎◎ 65

医学ジャーナリスト・医学博士

植田美津江

## 夢 見る 季節

2003年に新幹線の運転手が数秒間居眠りをしていたのがバレル騒動があった。その後、彼こそが昼間の強烈な眠気を主症状とする「睡眠時無呼吸症候群」であることがわかり、結果的にこの病名を世間に普及させることとなった。同時に、睡眠の研究は特に日本で遅れていることも判明した。この病気は耳に新しくなったが、先日ブックオフで入手した松本清張作「草の径」に収録されている「夜が怖い」には、すでにこの病名が登場する。1991年の作品であるのを知り、巨匠の先見の明に思わず唖ってしまっ

睡眠の研究が遅れているということは、睡眠についてはよくわかっていないことを意味する。眠っている間に見る夢についても、心理学的な、あるいは呪術的なウンチクがあるにはあるが、十分に解明されているとは言えない。夢は、見ても目が覚めてしばらくすると忘れられてしまうために、よけい重要視されていない気がする。

\* \* \*

ところで、私にはよく見る夢というのがある。ご多分に漏れず、どんな嫌な夢でもその多くは忘れてしまうのに、あまりに繰り返す見るためにそ

れだけは記憶に残るのだ。詳細やシチュエーションは毎回違ってはいるが、とにかく共通しているのは「約束の時間に約束の場所にたどり着けない」というものだ。通常なら、1時間もあれば余裕で間に合うはずのその場所に、何故かどうしてもたどりつけない。当然ながら、夢といえども焦る。しかし、焦れば焦るほど、電車が動かない、誰かが病気になる、乗るバスを間違えてしまう、などなど色々なトラブルが発生し、どんどん時間が経過するばかりなのだ。遅刻する旨を相手に知らせようと、思ってもそれすらできなくなってしまう状態に陥り、もう歯がゆくて仕方がない。そして、とつくに約束の時間が過ぎていくのに、まだそこに行こうと努力をする自分がいる。が、すでに丸一日以上経っているという、泣くに泣けない状況にひたすらはまっていくのである。

これは疲れる。大切な相手を待たせているという焦燥感やなぜもつと早くに準備をしておかなかったのかと悔やむ気持ち、自己嫌悪と自己憐憫、そしてイライラや動悸、発汗。それらを、休息のはずの睡眠中に経験するのだから、逆に疲れが溜まるのではないかと思ってしまう。結果的に途方に暮れたまま目覚めることが多く、疲労感とともに「ああ、またあの夢だった」と落胆に近い感情がほのかに残るのである。現実、私たちはたくさん約束事に囲まれている。どれも大切な用件だから、ミスをしたくない、時間にも遅れたくない、という思いが夢になって表われるのだろうと勝手に判断しつつ、仕事をしている限りはこの夢からは逃れられないのだとあきらめてもいる。

\* \* \*

ところが最近、もうひとつ良く見る夢が出てき

たのだ。これは先の内容とは全く違っている。どこの喜劇役者の素人集団が、入れ代わり立ち代りちよつとしたコントや小噺を私にしてくれる。ただそれだけの話だが、その内容がいつもものすごく面白いのである。最初は、疑心暗鬼で聞いている私だが、あまりにユニークで斬新なので、もう途中から笑い転げてしまう。「こんなに面白い話ははじめて」と笑いながら目が覚めるので、こちらは実に楽しい夢だったという満足感を味わえる。前者の夢でストレスを抱えた私を後者の夢が慰めてくれるのか、それとも現実の憂さを夢が晴らしてくれるようになったのだろうか？

いずれにしろ、たかが夢の話である。特別な意味づけをする必要もないのだろうが、夢の中でも泣いたり笑ったりと、まったく忙しいことだなあと思えるばかりなのである。